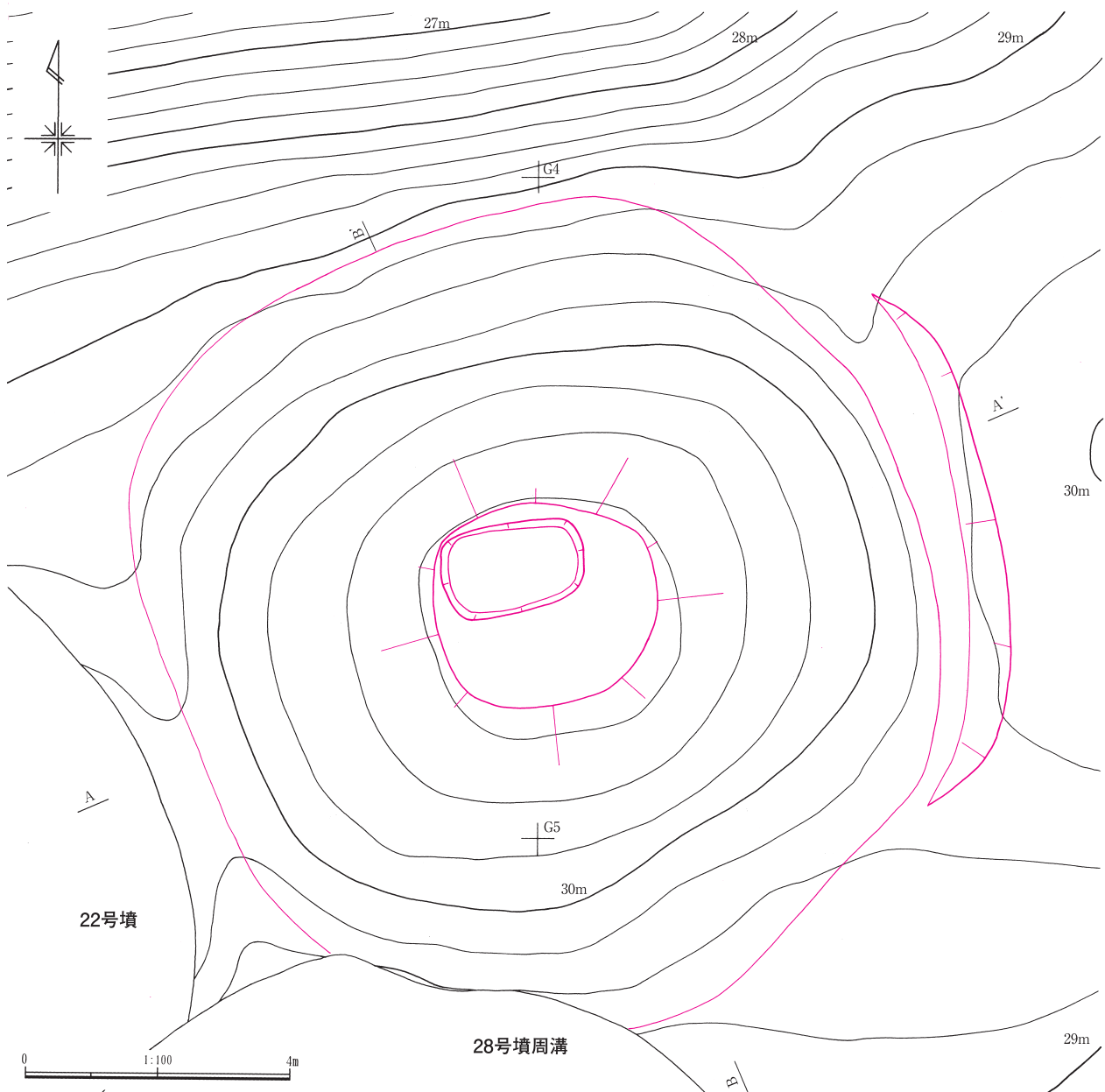
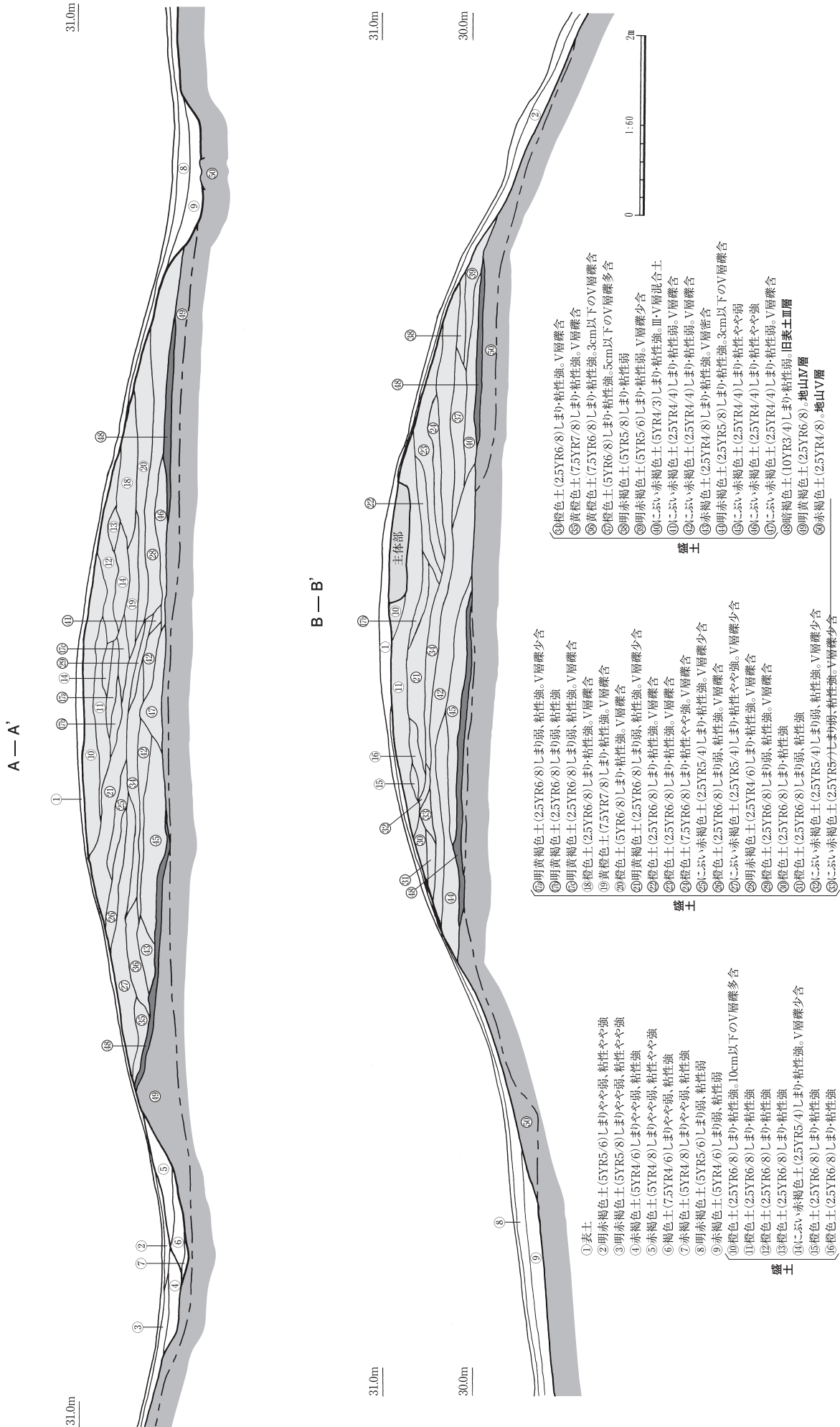


幅5mm程度のナデが不規則な間隔で12条巡る。55は須恵器礎で、肩部が大きく張り、口縁部径に比べ体部径の方が大きい器形が想定される。体部中央に2条の沈線を巡らし、その間に波状文を施した後、径1.5cmの円孔を穿つ。底部には、格子状のタタキ調整の痕跡が微かながら残る。口縁部から頸部については不明である。56は、頸部から口縁部に波状文を巡らす壺の口縁部片で、墳丘検出面で出土した。器形から、小型の壺と想定される。57は、壺または甕の口縁部と考えられる破片で、墳丘南側裾部で出土した。外面に須恵器坏身片が固着している。固着した須恵器坏身の形態は、受け部の復元径が14cm程度で、底部から受け部までの高さは2cm程度と想定される。これらの特徴は、田辺編年TK209型式並行の特徴を有することから、先述の54とは田辺編年で4型式程度の開きがある。そのため、本古墳に伴わない可能性が高い。

本古墳主体部出土の54～56は、田辺編年TK23・TK47型式並行の特徴をもっている。また、近接する23号墳と28号墳との切り合い関係から、本古墳は23号墳より新しく、28号墳よりも古いことが判明した。以上のことから、本古墳の築造時期は古墳時代後期前葉と考えられる。



第33図 23号墳墳丘平面図



第34図 23号墳填丘土層断面図

## 23号墳(第33～35図、巻頭図版8、PL.26～28)

## 位置と現況

調査地中央部のF4・5、G4・5グリット、丘陵鞍部上に位置する。23号墳の西には22号墳が、南には28号墳が近接して存在する。23号墳の立地する丘陵鞍部は狭い平坦面を形成しており、平坦面上の標高は約30.0mを測る。調査前の地表面観察で明瞭な高まりが確認できたため、容易に古墳として認識できた。

## 調査経過

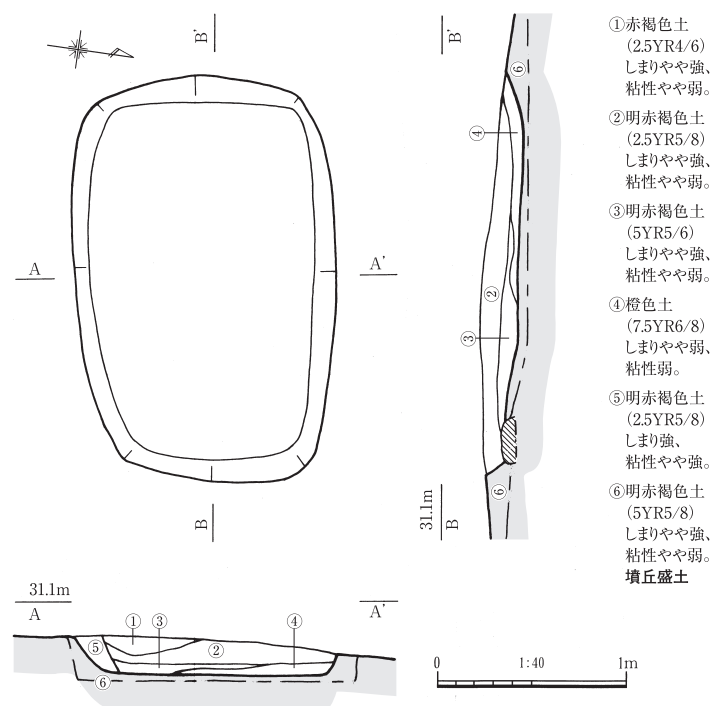
23号墳と22号墳および28号墳との新旧関係を把握するために、それぞれの古墳間にトレンチを掘削し、土層の堆積状況を確認した。その結果、本古墳の流土堆積後に22号墳が築かれていることと、本古墳が28号墳の周溝に切られていることが判明したため、22号墳の墳丘記録を作成した後に本古墳の調査を開始した。表土除去前に、尾根鞍部上の古墳を通して設定した東西ベルトと、これに直交する南北ベルトを設定した。その後、表土・流土を除去し、墳丘・周溝を検出した。続いて、主体部の調査、墳丘の断ち割り、盛土の掘り下げを行った。

## 墳丘

墳丘は東側に掘切状の周溝をもつ円墳で、墳丘規模は東西11.5m、南北12.5m、高さ1.5mを測る。なお、22号墳が重複して構築されたため墳丘西側の形態が不明であるが、本来は西側にも周溝があった可能性が考えられる。墳頂部の標高が最高点で30.95mを測り、西側墳端と墳頂の比高差が約1.2m、東側周溝低との比高差が約1.3mである。周溝の幅は約1.0m、深さは約0.2mを測る。

墳丘は地山掘削および盛土によって構築される。構築過程は、まず周溝掘削と墳丘裾部の地山削り出しを行い、その後、掘削の排出土を地表面上に盛土する。盛土(10～47層)の厚さは墳丘中央付近で最大0.6mを測る。各層とも厚さ10cm程度のやや大きい単位で施されており、大別して赤褐色系(地山V層由来)と黄褐色系(IV層由来)の2種類の土が用いられる。盛土の下には旧表土III層(48層)があり、これが古墳築造直前の地表面と考えられる。その直下に地山のIV層(49層)またはV層(50層)がある。

土層断面からは、盛土は次の数回の工程に分けることができる。①：墳丘南西部分の地表面上に径4～5mの土饅頭を造る(41～47層)。②：墳丘北部分の地表面上に、①の土饅頭と同じ高さまで土を盛る(37～40層)。③：墳丘全体に土を盛り、上面をほぼ平坦にする(28～36層)。④：③の平坦面の西側端部付近と北側端部付近に堤状に土を盛る(25～27層・22～24層)。⑤：南西部分に土を盛る(21層)。これによって、南北方向はほぼ平坦となるが、東西方向では西側が高くなる。⑥：低く残っていた東側に、東



第35図 23号墳主体部

西が平坦になるように土を盛る(18～20層)。⑦：平坦面を保つようにやや細かい単位で土を盛り(12～17層)、その後大きな単位で墳頂部の盛土を施す(10・11層)。

### 主体部

墳頂部平坦面の北寄りで主体部を1基検出した。主体部は、墳丘盛土面上面(10層)から掘り込まれた、隅丸長方形を呈する墓壙である。規模は、長軸2.1m、短軸1.4m、深さ0.2mを測る。主軸はE-7°-Nで、尾根筋に対してほぼ平行している。明瞭な木棺痕跡などは平面でも土層断面でも確認できなかった。墓壙内からは遺物は全く出土しなかった。

本古墳からは出土遺物が全く出土していないため、古墳築造時期の比定は難しい。ただし、本墳は22号墳と28号墳に切られていることが分かっている。先述のように22号墳は28号墳に切られているため、これらの古墳の築造は23号墳→22号墳→28号墳の順になる。22号墳は古墳時代後期前葉の築造と考えられることから、23号墳はこれ以前のものと考えられよう。22号墳は23号墳の周溝堆積土を掘り込んで墳丘を築くことから、23号墳築造から22号墳築造の間に流土が堆積するだけの時間差があったことが考えられる。ただし、それがどれほどの期間なのかは不明なため、23号墳が22号墳に先行するという以上の時間的な関係は分からない。以上のことから、23号墳は古墳時代後期前葉以前に築造されたと考えられる。

## 24号墳(第36～38図、表3、PL.29～31・77)

### 位置と現況

調査地東部の丘陵鞍部、C2・D2・C3・D3グリッドに位置する。24号墳の東には25号墳が、北には30号墳が近接しており、本古墳の北側周溝は30号墳の周溝に切られている。西側には2mほどの間隔をおいて27号墳の周溝がある。付近の丘陵鞍部は西に向かって下るやや急な斜面を成しており、24号墳付近では西側の標高が32m、東側が34mとなっている。調査前の地表面では、墳丘はわずかな地形の高まりとして認識できた。

### 調査経過

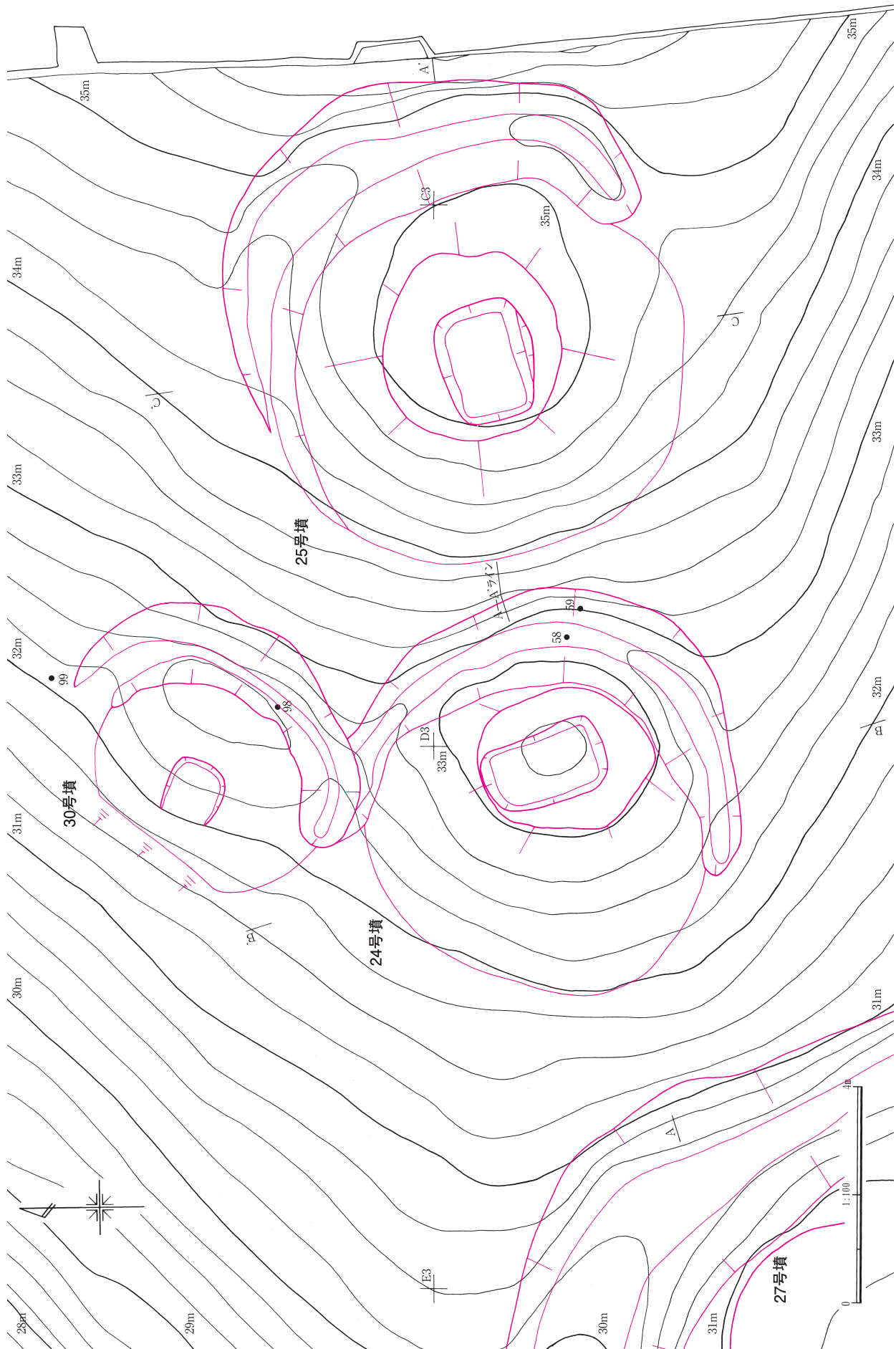
本古墳は試掘が行われており、墳丘の東側に周溝がめぐることが確認できていたほか、24号墳と25号墳の間には直接の切り合い関係がないことも判明していた。しかしながら、両古墳が近接しているため、両者の土層堆積の関係を確認する必要があると判断し、24号墳から25号墳にかけて東西軸の土層観察用ベルトを一本に通して設定した。南北軸のベルトはこれに直交するように設けた。

ベルト設定後、表土および流土を除去し、墳丘面と周溝の落ち込みを検出した。この過程で24号墳の北側から30号墳の周溝を検出し、これが本古墳の周溝を切っていることが判明した。そのため、30号墳を先行して調査した後、24号墳の周溝を掘削して墳丘を検出し、その後主体部の調査、墳丘の断ち割り、盛土の掘り下げを行った。

### 墳丘

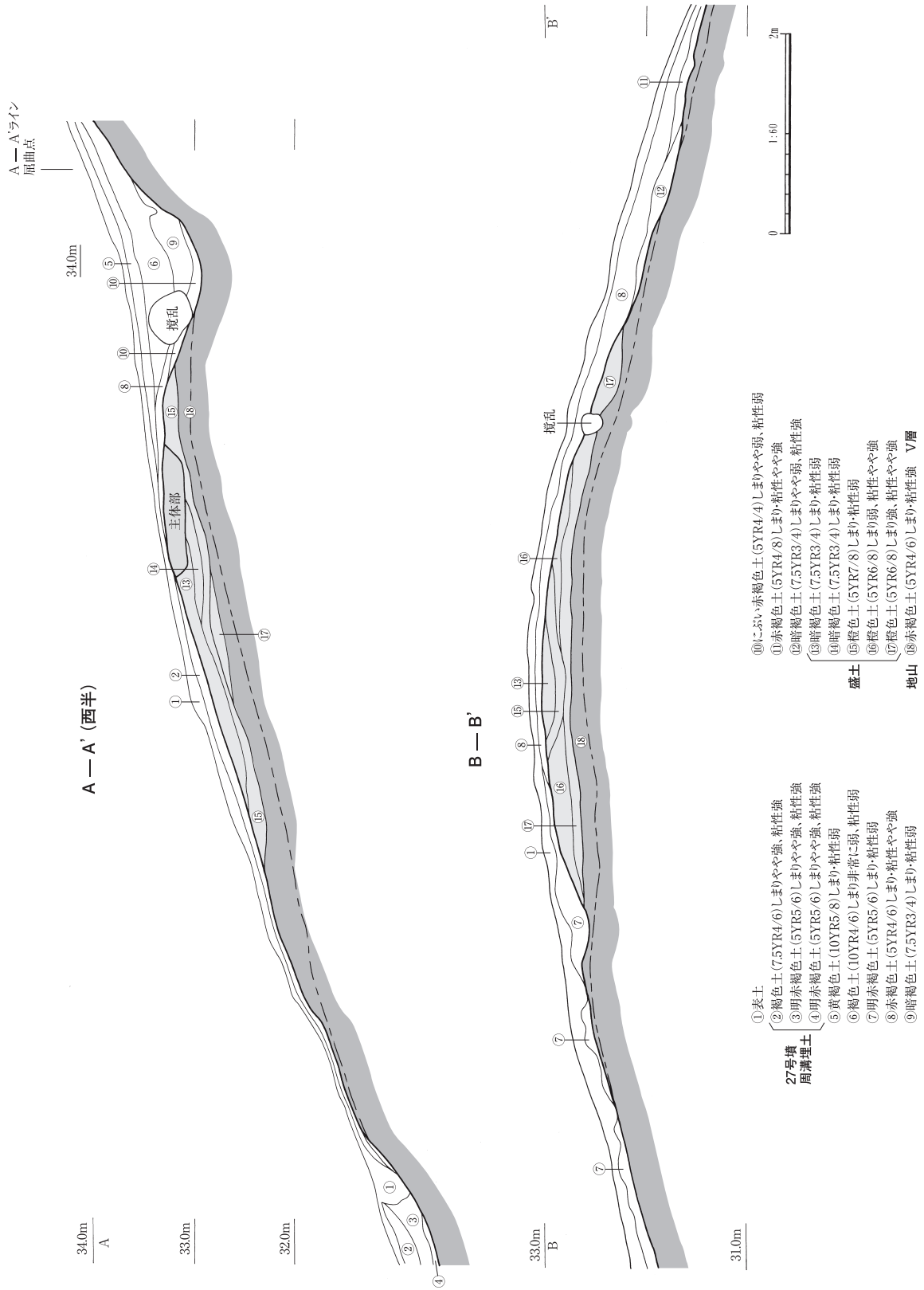
墳丘上に堆積した表土・流土は、墳頂部では薄く、南北斜面ではやや厚く堆積していた。周溝内の堆積は最下層が24号墳墳丘からの流土で、その他は基本的に25号墳側からの流土と考えられる。これらの堆積土を除去し、墳丘を検出した。

墳丘は、東側に馬蹄形の周溝がめぐる円墳で、その規模は周溝内側で径約6.5m、周溝を含めると径約7.5mを測る。墳頂部の標高が最高点で33.31mを測り、西側墳端と墳頂の比高差が約1.3m、周溝

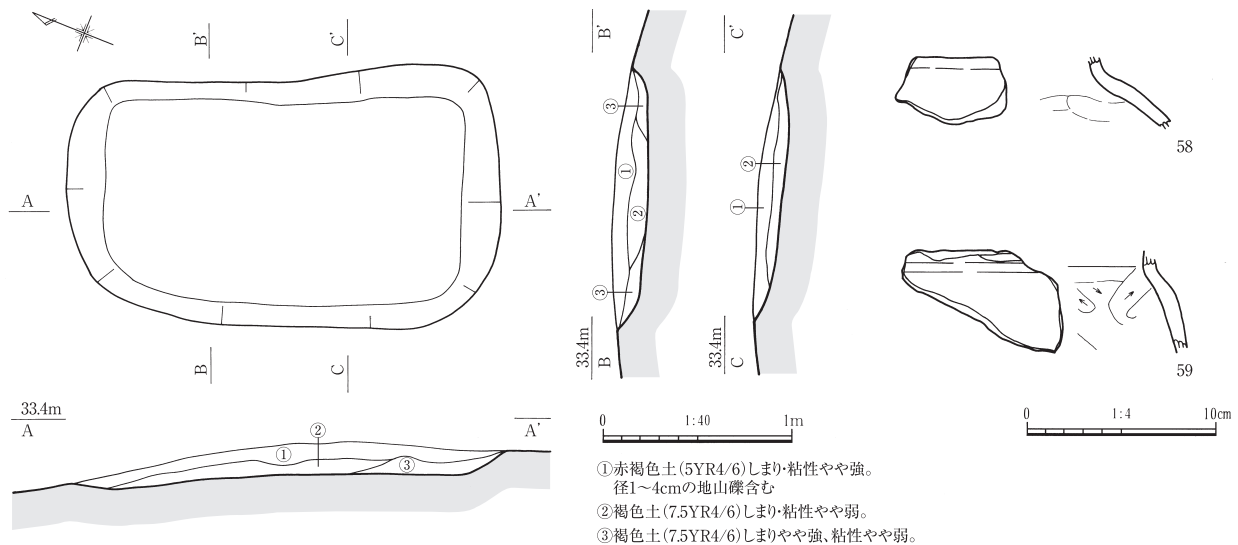


第36図 24・25・30号墳墳丘平面図





第37図 24号墳填丘土層断面図



第38図 24号墳主体部・墳丘出土遺物

底と墳頂の比高差が約0.5mである。

墳丘は周溝掘削と盛土によって形成されている。墳丘の東側をめぐる周溝は、盛土を施す以前に掘削されており、掘削時の排出土が盛土に用いられたと考えられる。斜面地に古墳を築く場合は、斜面の高い側に周溝を掘削し、これを盛土として利用するのが築造方法として合理的であろう。盛土は5層確認でき、それぞれの層が広い範囲に施されている。盛土の下面には旧表土が確認できていないので、盛土以前に地山の整形を行っていた可能性も考えられるが、周辺の旧地形を見る限りでは整形があったとしてもその規模は小さかったと予想される。また、盛土の上部が暗くにごった暗褐色の土層となっていることから、周辺の地表付近の土が盛土に用いられた可能性も考えられる。

### 主体部

墳頂部平坦面のほぼ中央で1基の墓壙を確認した。墓壙の掘り込み面は墳丘上面で、墓壙底面は地山に達していない。

墓壙は方形で、長軸(南北軸)は2.3mを測り、短軸(東西軸)が北側で1.2m、南側で1.4mと南側が広がっている。墓壙の主軸はS-23°-Eで、墳丘の南北軸とほぼ平行する。墓壙の深さは10数cmから20cmと非常に浅いが、墳丘の遺存状態が悪く、本来の墓壙の上部が流失してしまった可能性が高い。底面にはわずかに長軸方向の傾きがあり、北端部より南端部の方が数cm高い。

墓壙内埋土の土層断面では、棺痕跡などは確認できなかった。また、遺物も全く出土していない。

### 出土遺物

墳丘流土および周溝埋土掘削中に数点の土師器片が出土している。ここには図化可能なものを2点掲載した。58・59とも土師器甕の肩部付近の破片で、古墳時代中期または後期のものの可能性が高い。いずれも周溝埋土上層からの出土で、斜面上方から流れ込んだ可能性が高い。図化しなかったものも大半がこれらと同時期の可能性が高い土師器甕片である。

このように古墳に伴う遺物が出土しておらず、本古墳の築造時期は明らかにできなかった。

25号墳(第36・39～42図、表3、PL.32～36・77～79)

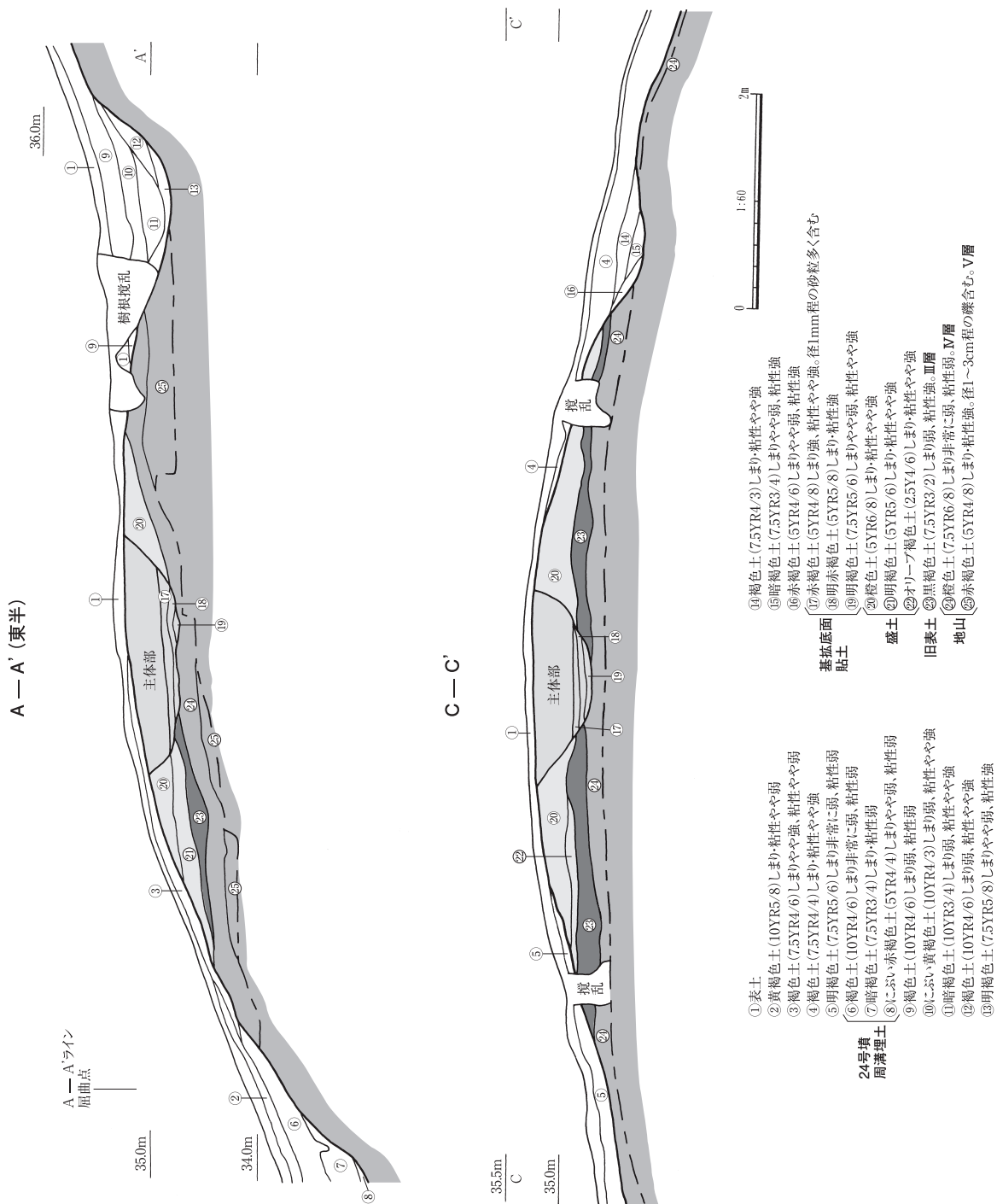
位置と現況

調査地東端付近の丘陵鞍部、B2・C2・B3・C3グリッドに位置する。本古墳の西には24号墳が近接している。付近の地形は西に向かって下るやや急な斜面を成しており、25号墳付近では西側の標高が34m、東側が36.5mとなっている。調査前の地表面で墳丘の高まりと墳頂平坦面が認識できた。

調査経過

先述のように24号墳との土層堆積の関係を確認するため、24号墳から25号墳にかけて東西軸の土層観察用ベルトを通して設定し、南北軸のベルトはこれに直交するように設けた。

ベルト設定後、表土および流土を除去し、墳丘面と周溝の落ち込みを検出した。その後、周溝を掘



第39図 25号墳墳丘土層断面図



削して墳丘を検出し、続いて主体部の調査、墳丘の断ち割り、盛土の掘り下げを行った。

### 墳丘

墳丘上に堆積した表土・流土は、墳頂部では薄く、斜面ではやや厚く堆積していた。周溝内には墳丘からの流土と古墳の東側の斜面からの流土が見られる。これらの堆積土を除去し、墳丘を検出した。

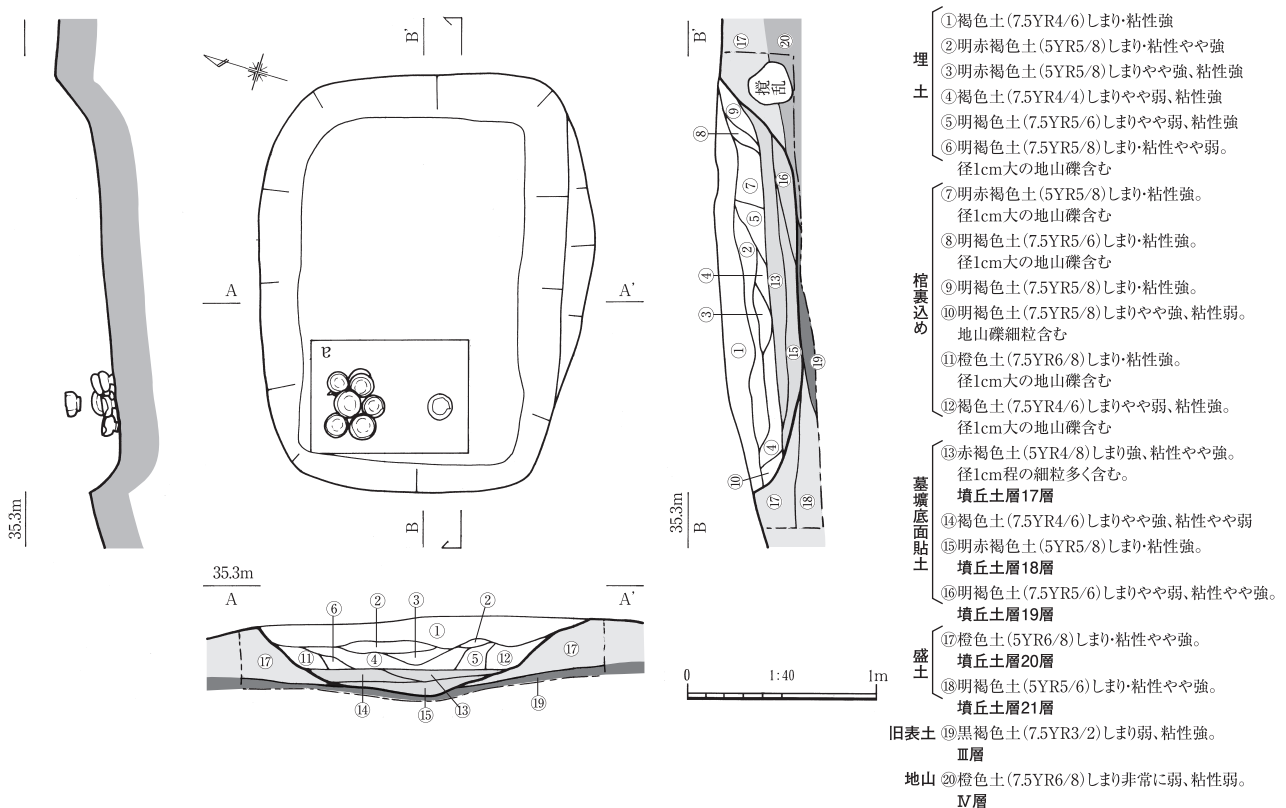
墳丘は、東側に馬蹄形の周溝がめぐる円墳で、その規模は周溝内側で径約7.5m、周溝を含めると東西長約9.2m、南北長約8.3mを測る。墳頂部の標高が最高点で35.23mを測り、西側墳端と墳頂の比高差が約1.3m、周溝底と墳頂の比高差が約0.5mである。なお、周溝の北側端部では掘り込みの立場が確認できていないが、元々周溝底面が西の斜面へ向けて連続するように掘削されていたものか、掘り込みの肩が流失してしまったものか、いずれであるかについては判断できない。

墳丘は周溝掘削と盛土によって形成されている。盛土下面では、一部を除いて旧表土を検出しており、旧地表面をほとんど改変することなく盛土を施していたことが分かる。墳丘の東側をめぐる周溝は、盛土を施す以前に掘削されている。24号墳同様、この周溝掘削に伴う排出土が盛土に用いられたと考えられる。盛土は大きな単位で行われていて、断面ではわずか3層しか確認していない。その施工過程は、まず旧地形の低い部分に土を敷き(21・22層)、その後墳丘全体に厚く土を盛っている(20層)。盛土のほとんどが20層一層で占められることから、一気に盛土を仕上げた様子がうかがえる。

### 主体部

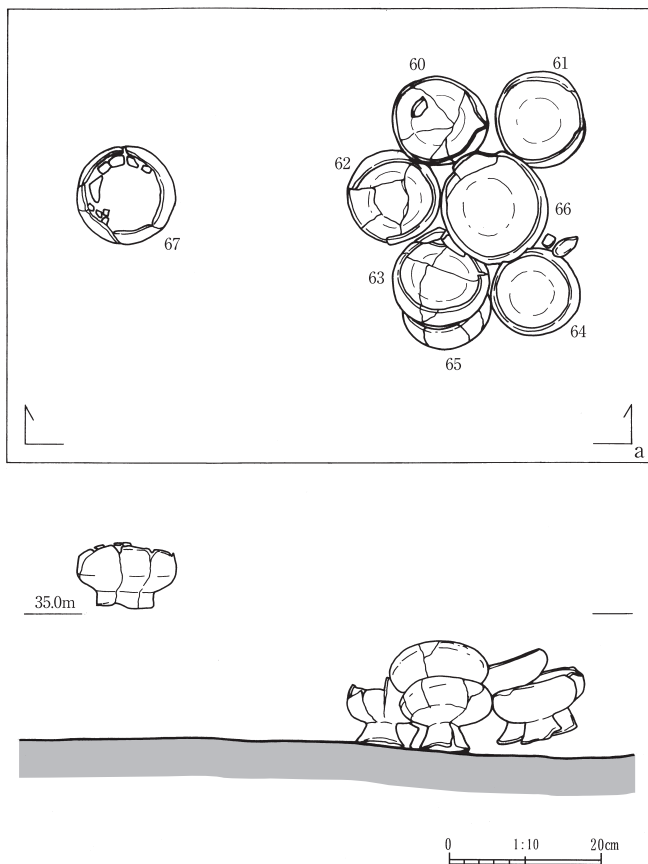
墳頂部平坦面のほぼ中央で墓壙を1基確認した。墓壙の掘り込み面は墳丘上面で、墓壙掘り方の底面は地山に達している。

墓壙は方形で、長軸(東西軸)は2.2mを測り、短軸(南北軸)が1.6mである。主軸はE-17°-Nで、



第40図 25号墳主体部

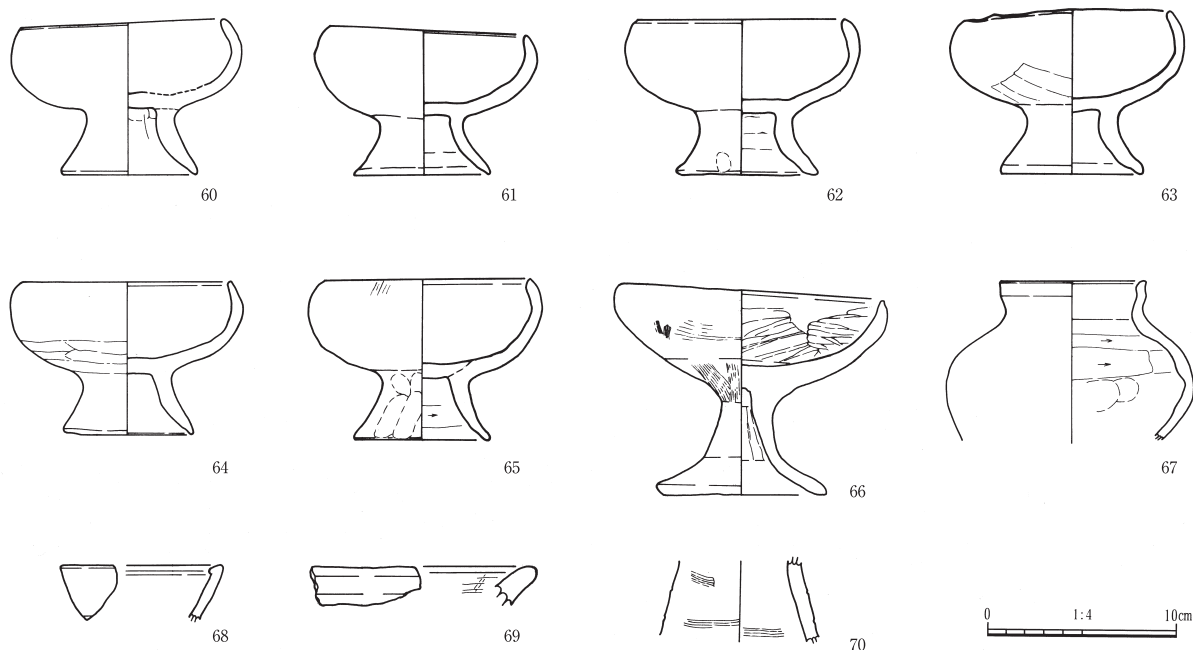
墳丘の東西軸とほぼ平行する。墓壙は、掘り方を一旦深く掘削した後に、底部に貼り土を施して底面を平らに整えている(13～16層)。掘り方の深さは約40cm、墓壙底面までの深さは約25cmである。墓壙の底面は長軸方向に傾斜しており、西端部が東端部よりも10cmほど低い。



第41図 25号墳主体部遺物出土状況図

墓壙内の土層の堆積状況からは、木棺が埋納されていた可能性が高いと判断しており、2～6層が棺内埋土、7～12層が棺の裏込め土であると考えている。ただし、平面的には棺痕跡を検出できなかった。土層断面からこの棺の規模を想定すると長さ1.45m、幅0.85mとなる。

墓壙内からはほぼ完形の土師器を8個体検出した。墓壙底面の北西部から脚付碗6個体(60～65)と高坏1個体(66)が、その南方の検出面付近からは壺1個体(67)が出土した。67は墓壙底面から17cm浮いて、口縁を下に向けた状態で検出した。その出土状況から見て、棺内の副葬品ではなく、棺上に置かれていたものである可能性が高い。その底部は水平に切り取られたように欠損しているが、墳丘検出時にはその欠損面がすでに頭をのぞかせており、墳丘が流失する過程で破損したも



第42図 25号墳出土遺物

のと考えられる。60～66は墓壙北西部底面でかたまった状態で検出した。これらの平面的な配置はよく整っており、高坏の周りに脚付碗を隙間なく組み合わせるように並べている。このうち脚付碗63と65は入れ子状に重ねられている。土層断面の棺痕跡から木棺の範囲を推定すると、これらの土器は棺内北西隅に置かれていた可能性が考えられる。

脚付碗60～65はいずれも形態・製作手法が近似する。口縁部が内湾する碗に低く幅広の脚部がつけられる。62・65には表面全体に赤彩が施されていた痕跡が確認できる。他のものにも赤彩が施されていた可能性もあろう。また、60・61・63は口縁部が一部打ち欠かれている可能性がある。66は碗状の坏部をもつ高坏で、坏部内面全面にミガキが施されるなどつくりが丁寧である。67は小型の壺で、退化した複合口縁をもつ。これらの遺物はおおむね古墳時代後期前葉のものと考えられる。

### 墳丘出土遺物

墳丘流土および周溝埋土掘削中に20点ほどの土師器片が出土している。ここには図化可能なものを3点掲載した。68・69は土師器甕の口縁片で、68は古墳時代中期ごろのもの、69は古墳時代後期～古代のもの可能性が高い。いずれも墳丘流土中からの出土である。70は周溝埋土中出土の土師器高坏脚部片で、古墳時代のものであろう。このほかに出土した土師器片もいずれも小片ばかりで、本古墳に伴う可能性は低いと思われる。

## 27号墳(第43～49図、表3・4・12、巻頭図版8、PL.37～42・80～82・84・85)

### 位置と現況

調査区東側E3・E4グリッド付近の、標高30～31mの尾根鞍部に位置する。本古墳の東側はやや急な斜面で、本古墳以西の鞍部は東西にほとんど傾斜のない平坦地となっている。調査前の地表面観察では明瞭な地形の高まりと溝状の窪地が確認できたことから、容易に古墳として認識できた。

### 調査経過

尾根鞍部上の古墳を通して設定した東西土層観察ベルトと、これに直交する南北ベルトを設定した後、掘り下げを開始した。厚さ10cm程度の表土・流土を除去した段階で墳丘面を検出した。墳頂平坦面では土坑状の落ち込みを確認して主体部として調査したものの、副葬品などの検出を見なかった。そのため断ち割りによって土層を再検討したところ、盛土の単位を落ち込みと誤認した可能性が考えられた。そこで、墳丘下部に主体部が存在する可能性も考えて、土層観察用のベルトを残した状態で盛土の掘り下げを開始した。その過程で、墳丘南寄りの盛土20層上面で主体部を検出し、その調査を行った。さらに盛土(20～43層)を除去した段階で、別の主体部を検出し、調査を行った。

以上のように2つの埋葬面が検出されたが、土層断面の観察からも埋葬ごとに盛土が行われていることが確認でき、埋葬から墳丘築造に至る過程を2段階で捉えられることが判明した。この状況からは、1度の古墳築造に伴う埋葬行為が墳丘構築の過程で2回行われた可能性と、一定以上の時間差をもった2回の埋葬に対して古墳墳丘をそれぞれ別々に2度築いた可能性が考えられる。墳丘土層断面の観察からは後者の可能性が高いと判断した(詳細については後述)。なお、21号墳でも同様の過程が確認されている点も、この判断を支持するものと考えている。以下ではこの理解のもと、新段階と古段階とに分けて報告する。

## 27号墳新段階(第43・44図、表3・12、PL.37～40・80・84・85)

### 墳丘

新段階墳丘は、表土・流土を除去した段階で検出した。

墳丘は東側に周溝をもつ方墳または楕円墳で、規模は東西が周溝内側で約14.0m、周溝外側で約16.0m、南北が12.0mを測る。墳頂部の標高は最高点で31.34mを測り、西側墳端との比高差が約1.4m、東側周溝底との比高差が約1.0mを測る。

墳丘は周溝掘削と地山削り出しおよび盛土によって築かれる。周溝は、墳丘東側に尾根を大きく断ち切るように「コ」の字状に掘られており、最大幅3.5m、深さ約0.6mを測る。この周溝は、古段階に掘削されていた周溝を再掘削して拡張した可能性が考えられる。盛土(14～17層)は古段階墳丘の上に施される。最も厚く盛土がなされる墳丘中央部で、最大45cmの厚さを測る。盛土には周溝や古墳周囲から掘削した排出土を用いたものと考えられ、大別して黄褐色系土(地山IV層由来)と赤褐色系土(V層由来)の2種類の土が見られる。盛土は20cm程度の厚さで広範囲に施されており、盛土の単位が大きかったことが分かる。

18・19層は新段階墳丘を構成する土層と判断したが、盛土ではない可能性を考えている。19層はしまり・粘性の弱い土質で、斜面に沿って堆積していることから、古段階墳丘が崩落することで形成された流土層の可能性が高い。18層は19層が暗色化した土層であるため、新段階盛土に被覆されることで形成されたブラックバンドの可能性もある。したがって、古段階墳丘は、築造後斜面が若干崩落した後、表土が形成されていた可能性がある。このことから、一度の古墳築造の過程で、連続的に2回の埋葬が行われた可能性は低いと考えられよう。

### 第1主体部

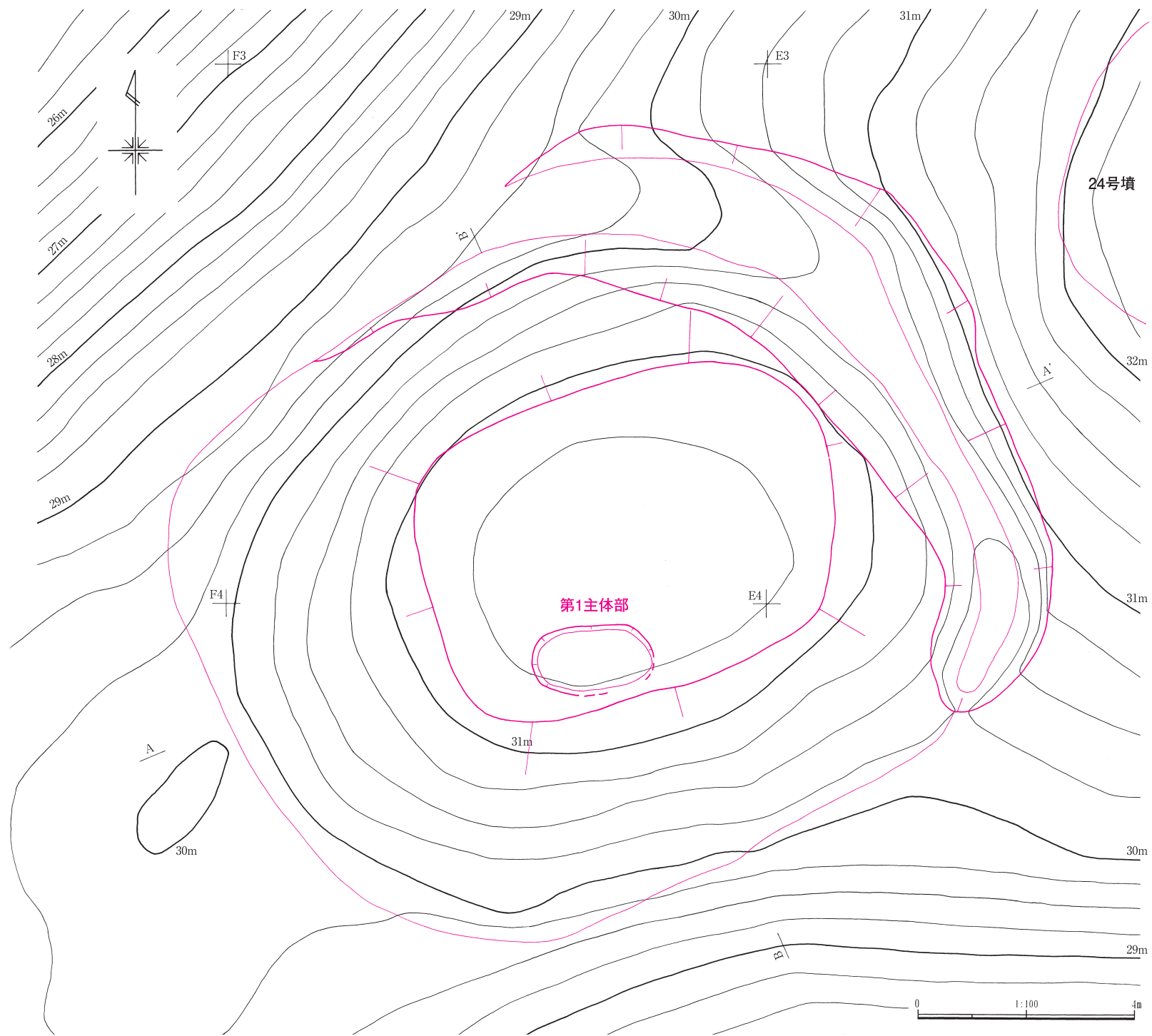
第1主体部は、新段階墳丘の構築以前につくられた主体部である。主体部は古段階墳丘の墳頂平坦部南西縁で検出しており、新段階墳丘との位置関係を見ても、その中心からかなり南に寄っている。掘り込み面は古段階墳丘面の上面(20層上面)で、新段階墳丘の墳頂から約50cm低い位置にある。隅丸長方形を呈する墓壙で、長軸2.25m、短軸1.3m、深さ0.2mを測る。墓壙の主軸はE-4°-Sで、墳丘長軸や尾根筋にほぼ平行している。木棺の痕跡は確認できなかったため、素掘りの墓壙に直葬していたものと思われる。

遺物は、墓壙底面から須恵器坏蓋2個体(71・72)と須恵器坏身1個体(73)、鉄製刀子1点(F13)が出土した。須恵器坏は、墓壙の中央東寄りの底面に坏蓋71・72が並べて正位に置かれ、坏身73がそれらの上に伏せて重ねられた状態で出土した。F13は須恵器坏の北西側から、切先を西に、刃部を北側に向けて出土した。これらの遺物の出土状況から、須恵器坏は転用枕と考えられ、被葬者は東頭位で埋葬されていたと考えられる。

### 第1主体部出土遺物

須恵器坏のうち、71は田辺編年TK10型式並行のものと考えられる。72は71よりも細部の形態が退化傾向を示すものの、調整が丁寧な点や器形の大きさから田辺編年TK10型式並行としておく。73は、胎土・色調・焼成・調整などが72と近似するため、72とセットを成していた可能性が考えられる。なお、71と73は径が全く合わないのでセットを成す可能性はない。したがって、73も72と同じくTK10型式並行と考えられる。以上のように、すべての須恵器がおおむね田辺編年TK10型式並行のうちに収まると思われるので、本主体部の埋葬時期は古墳時代後期中葉と考えられる。

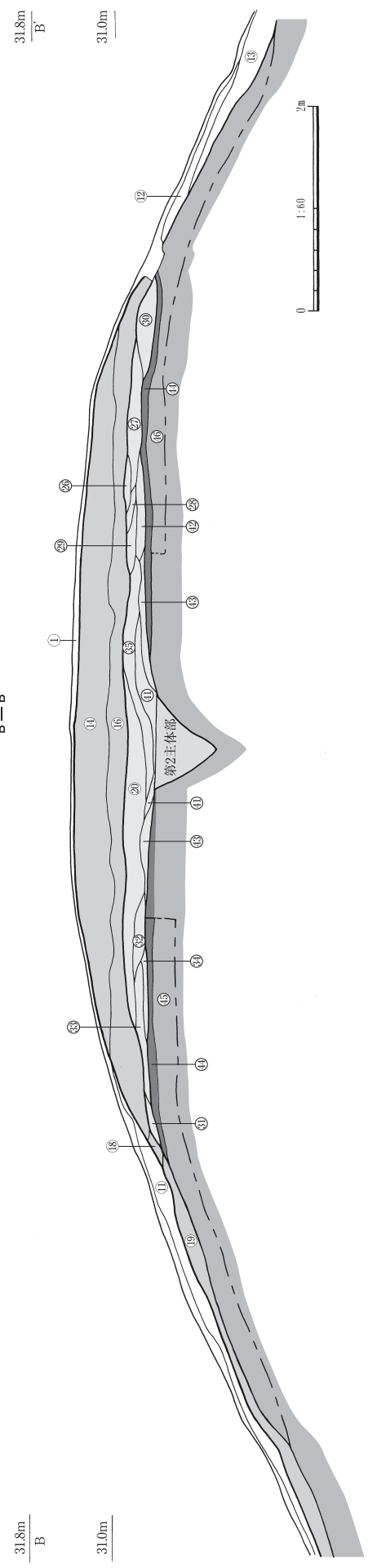
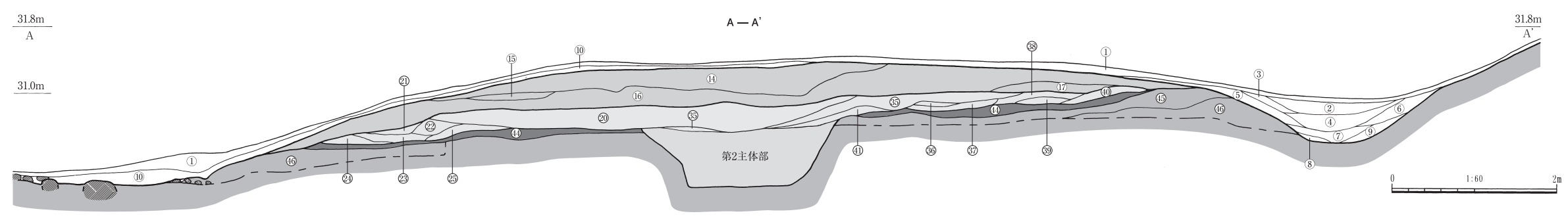




- ①表土
- ②褐色土(7.5YR4/6)しまり・粘性強
- ③赤褐色土(5YR4/6)しまり・粘性強
- ④暗褐色土(7.5YR3/4)しまりやや強、粘性強
- ⑤赤褐色土(5YR4/6)しまりやや弱、粘性強
- ⑥明赤褐色土(5YR5/6)しまりやや弱、粘性強
- ⑦にぶい赤褐色土(5YR4/4)しまりやや弱、粘性強
- ⑧赤褐色土(5YR4/6)しまり弱、粘性強
- ⑨明赤褐色土(5YR5/6)しまりやや弱、粘性強
- ⑩明赤褐色土(5YR5/6)しまりやや強、粘性強。径1~5cmの地山礫多く含む
- ⑪褐色土(7.5YR4/6)しまり・粘性弱
- ⑫にぶい赤褐色土(5YR4/4)しまりやや強、粘性やや弱
- ⑬にぶい赤褐色土(5YR4/3)しまり・粘性やや強
- ⑭橙色土(2.5YR6/6)しまり・粘性強。径5cm程の地山礫含む
- ⑮にぶい赤褐色土(2.5YR5/4)しまり・粘性やや強。径3cm以下の地山礫少量含む
- ⑯褐色土(2.5YR7/8)しまり・粘性強。径10cm以下の地山礫含む
- ⑰褐色土(5YR6/8)しまり・粘性強。5cm以下の地山礫含む
- ⑱暗褐色土(10YR3/4)しまりやや弱、粘性弱
- ⑲黄褐色土(10YR5/8)しまり・粘性弱
- ⑳明赤褐色土(2.5YR5/6)しまり弱、粘性やや強。径3cm以下の礫含む
- ㉑明赤褐色土(2.5YR5/8)しまりやや強、粘性やや弱。径3cm以下の地山礫多く含む
- ㉒明赤褐色土(2.5YR5/8)しまり・粘性やや弱。径5cm程の地山礫含む
- ㉓赤褐色土(5YR4/6)しまり・粘性やや強。径3~5cmの地山礫多く含む
- ㉔赤褐色土(5YR4/8)しまり・粘性やや強。径5cm程の地山礫多く含む
- ㉕にぶい赤褐色土(5YR4/4)しまり・粘性強。径5cm以下の地山礫含む
- ㉖赤褐色土(5YR4/6)しまり・粘性やや強。径2cm以下の地山礫含む
- ㉗にぶい赤褐色土(5YR4/4)しまり・粘性強。径5cm以下の地山礫含む
- ㉘オリーブ黒色土(5Y2/2)しまり・粘性弱
- ㉙暗褐色土(7.5YR3/4)しまり弱、粘性やや強
- ㉚明赤褐色土(5YR5/6)しまり・粘性強。径3cm以下の地山礫含む
- ㉛オリーブ褐色土(2.5Y4/3)しまり・粘性弱
- ㉜明赤褐色土(5YR3/3)しまりやや強、粘性弱。径2cm以下の地山礫含む
- ㉝オリーブ黒色土(5Y2/2)しまり・粘性弱
- ㉞明赤褐色土(2.5YR5/8)しまり・粘性強。径2cm以下の地山礫少量含む
- ㉟明赤褐色土(5YR5/8)しまりやや弱、粘性強。径1~2cmの地山礫少量含む
- ㊱明赤褐色土(2.5YR5/8)しまり・粘性弱。径3cm以下の地山礫少量含む
- ㊲明黄褐色土(10YR6/8)しまり・粘性強
- ㊳にぶい黄褐色土(10YR5/4)しまり・粘性強
- ㊴橙色土(5YR6/8)しまり・粘性強。径1cm以下の地山礫わずかに含む
- ㊵明黄褐色土(2.5Y6/8)しまり弱、粘性やや強。径2cm以下の地山礫わずかに含む
- ㊶褐色土(7.5YR4/4)しまりやや弱、粘性強。径1~2cmの地山礫少量含む
- ㊷褐色土(5YR6/8)しまり・粘性弱
- ㊸赤褐色土(2.5YR4/6)しまりやや強、粘性強。径1~3cmの地山礫多く含む
- ㊹オリーブ黒色土(5Y3/2)しまり・粘性弱。Ⅲ層
- ㊺黄褐色土(10YR5/8)しまり・粘性弱。Ⅳ層
- ㊻赤褐色土(2.5YR4/6)しまり強、粘性やや強。Ⅴ層

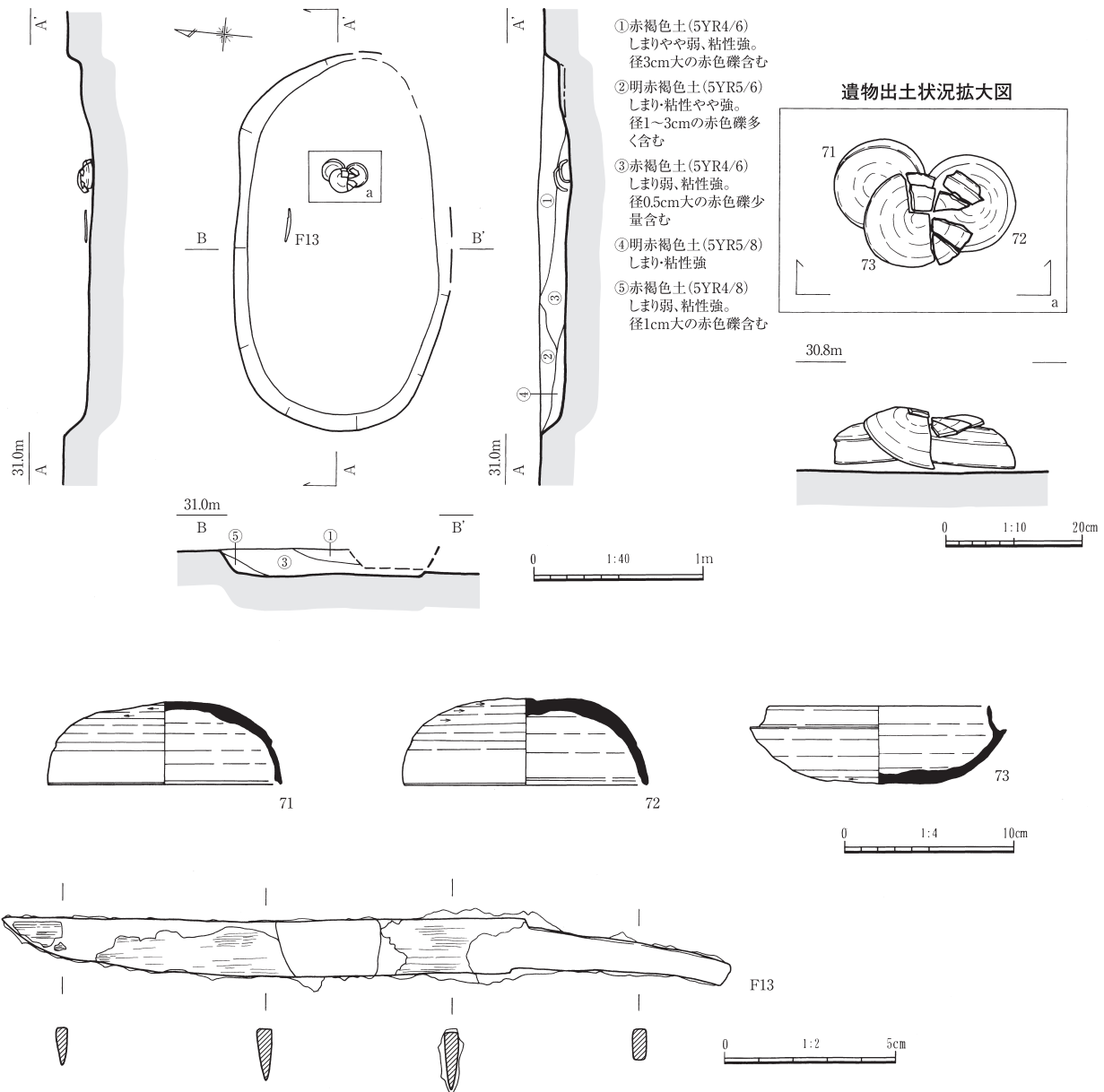
旧表土  
地山

新段階墳丘盛土  
古段階墳丘盛土



第43図 27号墳墳丘平面図・土層断面図





第44図 27号墳第1主体部

27号墳古段階(第43・45～48図、表3・4、巻頭図版8、PL.41・42・81・82)

墳丘

古段階墳丘は、新段階墳丘(14～19層)を除去した段階で検出した。古段階墳丘は、新段階墳丘の築造にあたって形状が改変されている可能性が高い。特に、古段階における周溝の形態については全く不明である。検出時の墳丘は、東西13.8m、南北12.0mの隅丸方形を呈する。検出時の墳頂部の標高は最高点で30.85mを測り、西側墳端との比高差が約0.9m、東側周溝底との比高差が約0.5mを測る。

古段階墳丘の上半部は盛土によって築かれている。盛土(20～43層)は旧表土Ⅲ層上(44層)に施されており、最も厚く盛土がなされる墳丘中央部で最大30cmの厚さを測る。盛土には、地山および旧表土の掘削土を用いており、暗褐色系土(旧表土Ⅲ層)・黄褐色系土(地山Ⅳ層由来)・赤褐色系土(V層由来)の3種類の土が見られる。墳丘下部の築造方法については、新段階墳丘の周溝・墳裾部の再掘削に伴って古段階墳丘が改変された可能性が高いことから、不明な部分が多い。しかしながら、盛土